

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第 895 号 平成 27 年 3 月 12 日

## 脱・ゆとり教育の成果？

文部科学省は、小学校学習指導要領実施状況を調査したところ前回調査時の 2004 年（平成 16 年）よりも同じ問題の正答率が高かった事を、明らかにしました。

この小学校学習指導要領実施状況調査は、次期学習指導要領改訂の検討のためのデータ等を得るために行われたもので、小学 4 年生から 6 年生を対象に以下の通り行われたものです。

- 実施時期

平成 25 年 2 月 18 日～3 月 8 日

- 調査対象学年と教科

第 4 学年：国語、社会、算数、理科

第 5 学年：社会、算数、理科

第 6 学年：国語、社会、算数、理科、音楽、図工、家庭

- 調査実施校及び調査対象児童数

911 校（全学校の 4.2%）

111,797 人（対象学年の 3.2%）

文部科学省によると、調査の内容は、現行の学習指導要領が掲げた「思考力、判断力、表現力の育成」等を見るもので、社会、算数、理科で前回と同一問題の正答率を比較すると、計 45 問中 23 問で前回は上回り、明確な差がなかったのが 13 問、下回ったのが 9 問、前回から教わる学年が変わった学習内容に関する問題を含めても、計 70 問中 30 問で正答率が前回は上回り、明確な差がないのが 17 問、下回ったのが 23 問だったとしています（2 月 12 日付朝日新聞他から）。

調査を実施した国立教育政策研究所の担当者は、今回の調査結果について「正答率の向上には様々な要因があって一概にはいえませんが、学習内容が増えた現行の指導要領が着実に定着しているとみられる」と評価しています（2 月 13 日付朝日新聞から）。

一方、ゆとり教育を推進した元文部科学省官房審議官の寺脇研氏（現京都造形芸術大学教授）は、「知識をどう役立てるか、1992 年に生活科を始めた時からの発想。思考力の育成も「総合的な学習の時間」を設けた 2002 年以降の方針だ。子どもがそうした力を付けるための努力を、先生が時間をかけて続けて来た成果が表れたのではないか。『脱ゆとり』になって急に力がついたわけではない」と述べています（2 月 18 日付朝日新聞から）。

このように、今回の調査結果に対しては、「脱ゆとり教育」の成果なのかどうか意見は分かれるところですが、子ども達の力が着実に向上しつつある事は、全国一斉の学力調査やPISA等の調査結果を見ても伺えるところです。

ただ、「脱ゆとり教育」といわれているものは2008年（平成20年）の学習指導要領の改訂によって登場するのですが、実際に導入されたのは小学校の場合は2011年（平成23年）ですので、寺脇氏がいうように、「脱ゆとり」になって急に力がついたわけではなかろうと私も思います。

今回の結果については、各学校、各教師の継続的な教育実践の賜物と評価しますが、同時に、正答率が上がったとはいっても下回ったものも少なくありません。

また、今回の調査において、児童に対し各教科が好きかどうか質問したところ、国語や理科、社会については「好きだ」と答えた児童が前回調査と比較すると増えていますが、算数については逆に減っています。ある教科を「好き」と感じるか「嫌い」と感じるかは、学習した内容の定着に大きな影響を及ぼす事になりますので、その点でも、なお工夫すべき余地があると思います。

こうした状況を踏まえれば、正答率が若干向上したからといって一喜一憂せず、学習指導要領の着実な定着に向けなお一層努力する必要がある事は、いうまでもありません。（塾頭：吉田 洋一）